

このエッセイでは、「研究に興味がある」「研究職を目指してみたい」と思う若い方々を主な読者層に想定し、センターの研究者にご自身の経歴と、研究職を選んだ理由をご紹介します。



池田篤史
Ikeda-Ohno Atsushi

—
先端基礎研究センター・耐環境性機能材料科学研究グループ

私は2023年に、JAEA内異動で前所属・福島研究開発部門・廃炉環境国際共同研究センター（CLADS）から先端基礎研究センター（ASRC）に移りました。CLADS・ASRCの前は、複数の海外研究機関・大学で延べ10年間、研究職に身を置いてきました。（経歴参照）

当たり前ですが、研究職に就く/就いている理由は、人それぞれだと思います。私の場合、1986年に当時のソビエト連邦（今のウクライナ）で起きたチョルノービリ*原発の過酷事故に幼心ながら衝撃を受け（当時小学校2年生）、そこから漠然と原子力に関心・興味を持ち始めました。その後、原子力専攻のある大学を志望して大学受験をしましたが、不勉強が祟って（当たり前ですが）不合格になり、化学系専攻のある大学に何とか滑り込みました。この“苦い経験”で一念発起、大学学部在学中は真面目に勉強し、大学院から原子力専攻のある大学に編入できました。大学院では、原子力と化学の両方が関係する「放射性物質の化学」の研究に取り組み、その後、2019年にCLADSに入るまで、放射性物質の基礎化学・環境化学に関する様々な研究に従事しました。CLADSでは、福島第一原子力発電所の廃炉作業を“化学的観点”から支える研究開発活動に参画しました。このCLADSでの職務を通して、自分は「基礎科学研究に強い興味がある」という事を再認識し、JAEAの内部異動制度を利用して現在の先端基礎研究センターに移り、現在に至ります。

上述のように、これまでの当方の学歴・職歴にはかなりの紆余曲折があります。それでも、当方が今日まで研究職

を続けている（続けられている）のは、研究という仕事が自分の性に合っているから、だと思います。どんな職業でも同じですが、仕事を始めるには「解決すべき課題」が必要です。この課題に対し、専門知識・技術を駆使して学術的・科学的な解決策を模索するのが“研究”だと、私は考えます。研究における解決策の模索は、AIが発達している現在でも、人間が頭を捻って試行錯誤する「根本的頭脳労働」です。この頭（時には体も）の試行錯誤はなかなか大変な作業ですが、当方の粘着質な性格とは割と相性が良いようです。

話は脱線しますが、当方は趣味でクライミングをしています。ここからは完全な私見ですが、クライミングと研究は非常に似ています。クライミングでは、先ず登りたいルート（課題）を決めます。そして、どのような道順・手順で、どのように体を動かせば（解決法の模索）、最終的なゴール（解決策）に辿り着けるかを、文字通り「頭と体で試行錯誤」します。このクライミングにおける一連の試行錯誤は、研究の試行錯誤と根本的には同じものだと、私はいつも感じています。

以上を踏まえ、研究に興味のある人は、試しに近くのクライミングジムを訪ねてはいかがでしょうか？あなたがクライミングにハマるようであれば、研究者／研究職に向いているかもしれません。



池田篤史プロフィール

2001年	明治大学 理工学部 工業化学科 卒業
2006年	東京工業大学大学院 原子核工学専攻 博士課程修了・博士号取得
2006-2008年	ドイツ・Forschungszentrum Dresden-Rossendorf、博士研究員
2008-2011年	JAEA（量子ビーム応用研究部門）、博士研究員
2011-2012年	ドイツ・Helmholtz-Zentrum Dresden-Rossendorf、任期付研究員
2012-2014年	オーストラリア・University of New South Wales / Australian Nuclear Science and Technology Organisation (ANSTO)、Joint Research Fellow
2014-2019年	ドイツ・Helmholtz-Zentrum Dresden-Rossendorf、Group leader / Principal investigator
2019-2022年	JAEA (CLADS)、グループリーダー / 研究主幹
2023年-現在	JAEA (ASRC)、研究主幹

* 英語ではChernobyl（チェルノブイリ）と綴られるが、ウクライナ語ではChornobyl（チョルノービリ）となる。